

# 平成28年度の東京鶴城会総会・懇親会に来てはいよ！

## 今年の会場は、あの霞が関ビル最上階です！

東京鶴城会会員の皆様、如何お過ごしでしょうか？  
 今年の東京鶴城会総会・懇親会は、日本初の超高層ビルとして知られた霞が関ビル(写真右。高さ147m)で開催されます。会場は同ビル35階(一般客が利用できる最上階)で、窓からの眺望は実に素晴らしく、感動されると確信しています。一年に一度の総会・懇親会です。級友との語らい、美味しい食事や楽しいイベントで、思い出のひと時をお過ごし頂きたいと思っています。卒業年度の幹事一同で、精一杯の“おもてなし”をさせていただきます。ご家族のご参加も大歓迎です。  
 どうぞ、お気軽に足をお運びください。心よりお待ちしております！



東京鶴城会便り

発行責任者  
田中幸資

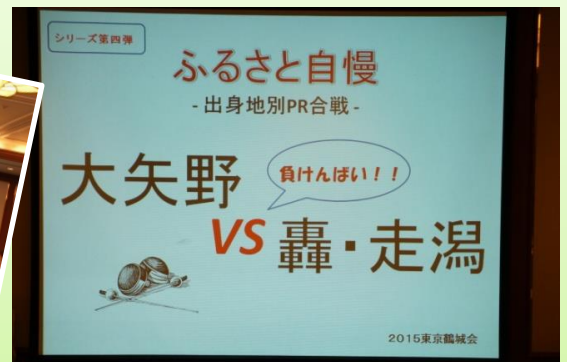
## 平成27年度東京鶴城会フォトコレクション



是非、ご参加ください。  
 霞が関ビル最上階で、楽しいひと時をお過ごしください！

面白いイベント、大くじ引き抽選会等で満喫した時間をお楽しみいただけます！

## 会場はイベントで大盛り上がり！



秘蔵の写真公開に会場の歓声が最高潮！？

大抽選会で会場は大賑わい！

恒例の「ふるさと自慢」大会では白熱したバトルが・・・！？

# 熊本のお奨めの温泉はどこかいた？

僕が宇土高を卒業して2、3年後に、深夜番組の「11 PM」（火曜日）で「うさぎちゃん」と呼ばれていた若い女性が露わな恰好で入浴しながら、温泉を紹介するコーナーが始まりました。根拠のない個人的な感覚ですが、このコーナーが始まり、秘湯や露天風呂に対する社会の関心が高まったような気がします（勝手なこじつけで申し訳ありません）。しかし、僕がこの番組を見ていたのは、あっけらかんとして上半身を晒していたうさぎちゃんを見たかったからです。

初めて露天風呂に入ったのは27歳の時で、昭和62年に職場の社員旅行で訪れた福島県の温泉でした。自分達以外に宿泊客は少なく、職場の先輩達はみんな酔っぱらっており、深夜に露天風呂に入ったところ、広い温泉を独り占め状態でした。その時初めて温泉はいいものだと思います。それからは、旅行に行く時や帰省する時は温泉に泊まることが多くなり、30代、40代は熊本の温泉に頻繁に泊まりました。

熊本で最初に宿泊した温泉は黒川温泉で、平成5年の事でした。今とは違い、少しだけ他県に名前が知られるようになった頃です。旅館Wに家族で宿泊しました。その後、家族とは平成12年にY旅館に、更に、厳密に言えば黒川温泉とは異なると思いますが、やまなみハイウェイ沿いにあるSKホテルにも平成11年に泊まりました。また、温泉好きの職場の友人とILKホテルに平成9年、10年に泊まりました。黒川温泉については今更紹介することは何もないと思いますが、団体客がなく、温めの露天風呂が実に心地よい温泉でした。今は混浴露天風呂も多いのかもしれませんが、僕が宿泊していた頃は、混浴は少なかったと思います。また、SKホテルの露天風呂は展望が素晴らしかったことを覚えています。

同じ阿蘇地方の垂玉温泉のY旅館（一軒しかありませんが）も露天風呂が素晴らしい温泉です。多分温泉ブームが来る前は秘湯の趣が強かったと思いますが、家族で安心して宿泊でき、同時に野性味も味わえる温泉です。平成10年に友人と初めて訪れ、平成12年には家族と行きました。滝の湯という露天風呂が特に素晴らしく、夕方に小学2年生だった長男と入ったところ、とても気に入ったようで、翌朝4時頃に起こされ、朝食までに4回入らされたことが強く記憶に残っています。なお、隣には地獄温泉のS荘もあり、こちらも有名ですが、残念ながら行ったことがありません。

その昔、阿蘇の温泉と言えば内牧温泉だったような気がします。そのホテルKにも平成9年に職場の友人と宿泊したことがあります。当時、露天風呂はなかったと思いますが、今は完備され、一人でも気楽に泊まれるようになっているようです。

昭和天皇が宿泊なされた、阿蘇山中腹にあった赤い屋根が印象的な阿蘇観光ホテル（湯の谷温泉）にも宿泊したことがありますが、平成12年頃に閉鎖されたようです。

海沿いでは、八代海を望む湯の児温泉のS館に一人で泊まったことがあります。熊本では珍しい洞窟の温泉があったと思いますし、料理も海の幸を堪能できました。松島のM亭には今から11年前に二男と二人で泊まりました。鯛シャブを食べたのはこの時が最初で最後です。また、生きたままの車海老を食すことができました。当時、魚が嫌いだった二男が美味しそうに食べてくれたことが一番嬉しい事でした。加えて、温泉としては期待していなかったのですが、入ったら十分癒されました。このように、僕が行った温泉は広く知られている所ばかりです。

今年2月に帰省した際に、宇土高同級生がご家族で経営されている「瑞恵」という料理店で同級生と旧交を温めていた時、熊本市内から近い日帰りできる温泉を尋ねたところ、久木野の「木の香湯」やグリーンピア南阿蘇が近隣ではお奨めということでした。

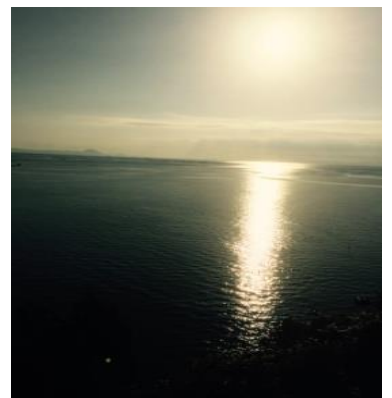
多分熊本では既に秘湯は存在しないと思いますが、「すごかー」という所や風情があり料理が美味しい所をご存知でしたら、是非、5月28日の総会の際にご教示下さい。声を掛けて下さることを楽しみにしております。

なお、「瑞恵」という料理店は、料亭の味をリーズナブルに食することができ、接客マナーが素晴らしいので、大人数でも一人でも利用しています。「熊本市瑞恵」で検索すると一発でヒットします。下通りの三年坂通りを東に上っていくと左側（鶴屋百貨店側）にあり、場所も便利です（住所：中央区安政町2の26）。熊本の郷土料理を始め、美味しさいっぱいのお店ですよ！

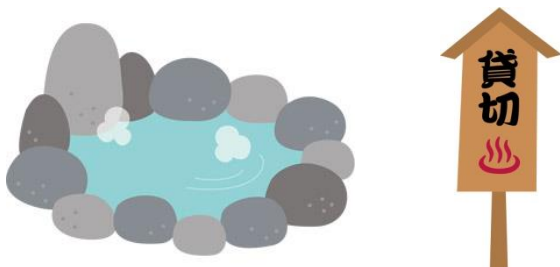
昭和53年卒 中山克美（松橋町出身）



三角西港浦島屋



有明海の夕日



## 「2015年現存天守閣を巡る男旅、松江城」

現存天守閣十二天守を巡る旅も毎年恒例になってきましたが、平成27年は出雲大社と松江城を巡る旅を企画実行しました。

前回の四国の現存四天守を巡る旅から、賛同同行を申し出る同期生が現れ、宇土高同期生3人で希少価値のある寝台特急「サンライズ出雲」の個室寝台を利用し、豪華な旅となりました。

当初は、山陰の現存十二天守のひとつである松江城制覇が最大の目的ですが、山陰に行くのであれば出雲大社参拝を強く提案する同行同期生の要望をかなえる為、最近では、寝台特急の運行が少なくなってきた現状なので、折角ならチケット獲得が困難な「サンライズ出雲」の獲得にチャレンジしてみたら、幸運にも個室寝台のチケットが確保できたので行きは寝台特急の旅となりました。

出雲への出発は、10月21日午後10時の東京駅9番ホーム。寝台特急は学生時代の「みづほ」以来で心がウキウキ、車内で眠れないといけないので出発前に東京駅のビヤホールで食事兼アルコールで、ほろ酔い気分で寝台特急に乗り込みました。「サンライズ出雲」は比較的新しい特急の為、車内はとても綺麗で快適な室内です。「みづほ」とは違いますね。特にツインの個室は、2階建て車内の1階部分なので、揺れも少なく何といても、ホームに停車中の視線が丁度ホーム下から見上げる事になり、美脚の女性がホームにいたら滅多に無いすごくいいポジションでお薦めです！

ツインの個室は同行の同期生2名に譲って、私は一人用個室寝台で2階建ての2階なので、このような楽しみは有りませんでした。車窓の景色は、2階から望む展望台の気分でした。岡山駅には翌日朝の4時頃着き、ここで瀬戸号と出雲号に切り離されます。ここから山陰への山岳地でカーブが多く、2階個室は結構揺れました！車酔いに弱い人には要注意です。それから約6時間、朝10時にやっとJR出雲市駅に到着、12時間の長い列車旅で学生時代を懐かしく思い出しました。

山陰の一日目は、出雲市駅からはレンタカーで出雲大社へ。無料駐車場から歩いて三の鳥居から御本殿に参拝し、神様は大国主大神、御本殿は立ち入り禁止の為、拝殿にて参拝します。有名な日本最大級の注連縄は、神楽殿でその迫力を実感できました。参拝作法は、拝礼二回した後、手を四回打ち鳴らし、最後に深く一礼する作法で、ほかの神社とチョット違うようです。参拝後は、参道の出店で買い物を楽しみ、名物の出雲そばで昼食。出雲蕎麦は、小振りの入れ物に、蕎麦とおつゆと一緒に入っていて、お好みで薬味を足して食べます。大体三段位に入れ物が分かっているのが普通サイズらしいです。

出雲大社参拝後は、宍道湖の北側を通過して境港へ。宿は鳥取の米子市にある皆生温泉、読めないですよ（かいけおんせん）と読みます。島根県と鳥取県は読めない土地名が多いです。宍道湖（しんじこ）、三朝温泉（みささおんせん）、羽合温泉（はわいおんせん）等々、大山（だいせん）、鳥取（とっとり）どう見ても（とりとる）としか読めないのですが、因幡（いなば）の白兔、読みにくいだけでなく鳥取と島根の境が解からないです。

しかし皆生温泉、ここは良かったです。総畳敷きの館内で、裸足で移動することができます。何といても歩いて気持ち良いです。部屋はジャグジー付きで写真では小さく見えますが、二人が足を伸ばして入れる広さで窓外は、あの日本海です。

部屋食担当の女性仲居さんと世間話で飲食と会食を楽しみ、旅の疲れとともにぐっすり寝込んでいました。

山陰二日目は、皆生温泉から境港・境大橋・中海・大根島を經由して、今回の本命、最近国宝になった「松江城」へ、天気が良かったのと金曜日と週末の為か？お城の駐車場が満杯で、入場できるまで30分ほど待ちました。築城から400年の歴史ある城で、天守閣の規模は中くらいです、石垣は北側が「野頭ら積み」でした、ちょっと変わった作りです。規模は、宇土櫓と同じくらいの大さだと思って下さい。

松江城は、そこそこにして、名物の「堀川巡り」に乗船。お城のお堀を周回する船に乗って、名調子の案内で松江を堪能することにしました。乗船場は、三か所あって乗り降り自由なので、途中下船して小泉八雲記念館・武家屋敷跡を観光しました。

山陰二日目の宿は、有名な玉造温泉です。期待に胸膨らませ向かいましたが、大規模ホテルの割には、部屋は狭く、夕食もいまいちで、昨夜の皆生温泉の良さととは格段の差でした。名の通った温泉でも規模が大きくなりすぎて、行き届かないもてなしになるのだなと思いました。

今回の山陰の旅は、現存十二天守の一つ「松江城」が本命でしたが、同行者が定着してきたため、以前の一人旅の良さから、旅程の計画立案、チケットの手配等々、準備に結構労力が必要な事と、皆さん年齢もあって、お城は坂・階段が避けられないので、つい、お城より会話・会食に盛り上がります。これはこれで良いのですが。

現存天守未訪問は、岡山県高梁市にある「備中松山城」、青森県弘前市にある「弘前城」、それと最後に残している兵庫県姫路市の「国宝姫路城」！残されたお城はできれば一人でゆっくりと、じっくりとお城を満喫し観察したいな！（あくまでも希望ですが）

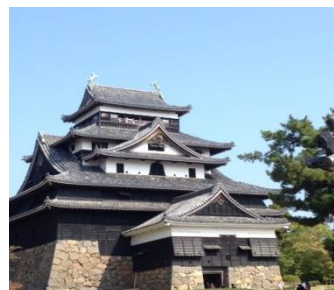
境屋由夫（昭和40年卒）



寝台特急「サンライズ出雲」



出雲大社のしめ縄前にて。



昨年、国宝に指定された松江城天守



ジャグジー付き温泉宿（皆生温泉）



松江堀川めぐり遊覧船



小泉八雲記念館・武家屋敷跡の周辺散策

# 私の宇土高校3年3組編

さて、いよいよ、まとめである、3年生編であります。3年生になる前に、私はひと事件を起こしてしまいました。

私の下宿屋に一つ上の松橋高校に通う、息子がいたのですが、その息子も、明日が卒業式という日に「おい、松藤、パチンコに行ってみんや？」と誘われ、当時、市役所の通りにあった、「桃太郎会館」だったと記憶していますが、そのパチンコ屋さんについて行くことになりました。

なんせ、初めての経験、玉の買い方も分かりません。息子にいろいろ教わりながら（ということは、息子は初めてではなかったのですね。）店内をウロウロして、いざ、玉を買おうとしたところ、私の肩をたたく人の手。振り返ると、なんと、担任のN先生。「何ばしいーおっとかい?」、「何ばしいーおっとかいて? 玉買うとたい」とも応えられず、俯くと、敵が、一言。ドスの効いた声で、「下宿に帰っとけ!」。パチンコ初体験はあっけなく、未遂に終わりました。その後が大変です。ほどなく、担任のN先生が私の待つ下宿へ。ドアを開けたとたん、ピンタ3発。（今なら暴力事件ばい!）そして、「明日、かあちゃんばべ!」翌日は、めでたい卒業式です。顔見知りの、卒業生の父兄の方から「あら、あんたげも今年卒業な?」と声をかけられながら、職員室へ。赤点で慣れてるはずの「父兄召喚」も、この日は、ちと、違って、大目玉を喰らってしまいました。尚、心配していた、下宿の息子も松橋高校の卒業式を無事終えることができました。それでも、謹慎処分も無く、3年生進級。我々の頃は、3年生になると、希望進路ごとに、就職、国立理数系、国立文系、私立理数系、私立文系と4つのクラス分けになるのですが、今、考えると、公務員志望等のはっきりした就職する勇氣もなく、また、自分の将来について、何も考えていない私は、一番楽そうだなと思い、私立文系進学クラスを選んだように思います。3年3組は、「ようも集まったね。」というくらい、ワサモンの女子が多く、皆、剣道部と見間違うくらい長いスカートを競って、学制鞆はぺったんこ。中身は化粧品。相対して男子は、おとなしく、一人「そっちの道」に秀でたY君の話聞き、興奮しながらも、クラスの女子とは「目を合わせるな」を合言葉に、ひたすら、女子に恭順の体で3年生の学生生活を過ごしました。今も、それぞれ、「だまくらかした」ご主人を尻に敷いてることは間違いありません。

その頃の私は、春休み前の失恋の痛手から、なかなか立ち直ることができず、抜け殻のような生活を送っていました。国立文系コースに進んだ、上の階のクラスの彼女の姿をずっと追いかけていました。元来、私はあきらめの悪い方で、引きずる体質です。つい最近まで、いや、今でも面影を引きずっているようです。男性だったら心当たりがおありでしょう!皆3年生になり、それぞれ、就職のため、進学のため、目の色を変えて目標に向かって進んでいるのに、私は、公務員へ向けての講習会も、ただ一度出席しただけであきらめ、かといって、目標大学を定めての受験勉強をするでもなく、どんどん時間は過ぎて行き、少し焦り始めても「まあ、どぎゃんかなったい。」と思い続けていました。そんなある晩秋の日に、その後の私の人生を大きく変える人が私の下宿を訪ねて来られたのです。

その方は、一年先輩で、サッカー部OBのHさんです。

在学中は私の下宿の部屋で、よく一服休憩をなさってた方で、卒業後は旅行会社大手のK社に就職されていました。その日は、秋の修学旅行の添乗の仕事も一段落し、休暇で宇土に戻られ、ついでに、私をからかいに下宿に寄ったようですが、いろいろ話しているうちに先輩が、「修学旅行の添乗は、よかじゅー、」「添乗が終わって別れ際に、女子高生が胸に縋って、泣いてくれるとじゅー。」と言うではないですか。その後も、旅行会社の話を面白おかしく話していただき、最後に「あんたは調子のよかけん、旅行会社にむいとるばい。」と褒められたのか、貶されたのか分からない言葉を残されて帰って行かれました。その先輩とは、後日、同じ会社に入り、東京で何度か飲む機会を得て、その時の話で大いに盛り上がり、今でもK社の私のいた部署では有名な笑い話になっているそうです。

先輩の添乗の話から、至って不純な動機ながら、進路を旅行会社への就職と定めたのですが、その年の高卒での就職活動は既に終わっており、何年か後の旅行会社への就職をするための進路を担当の先生と相談し、調べた結果、旅行の専門学校が存在を知りました。いくつかの専門学校の願書を取り寄せてみましたが、昭和50年頃の旅行会社は花形企業と称され、その分、就職人気も高く、専門学校も多く、どこの学校が良いのか全く見当もつきません。

また、宇土高校からの専門学校への進学もほとんどなく、先生方も分からない状況だったのでしょう。また、大学進学とくらべたら、専門学校を見下す先生もいて、卒業式の日私にむかって、「お前が専門学校に行っても旅行会社に入れるわけがない」と言われ、非常に悲しい思いもしました。

結局、神奈川県の小田原に近い二宮町の「日本観光専門学校」を選んだのですが、選んだ理由は、田舎であること、経済的な理由で、茅ヶ崎のホテルの社員寮に住み込みで、仕事をしながら、学校へ通えることが決め手になりました。進路が決まり、残りの高校生活を楽みにしていたのですが、みんな、受験や、就職の準備等で忙しく、冬休み前からの印象があまり残ってないことは非常に残念です。

かあちゃんも、父兄召喚ではなく、卒業式に出席した後、かあちゃんは先に家に帰ってもらい、下宿での最後の夜

時効で許していただくことで、告白します。下宿の親父も交えて、どんちゃん騒ぎ。二日酔いの初体験。

最後に、今の私から、高校生の私へ一言。「あたは宇土高になんばしに行ったと?」

松藤 明(昭和50年卒)



## 横浜マラソン完走！

今年の3月に開催された、横浜マラソンで無事4時間40分で完走しました。（まだまだ平凡なタイムですが）ジョギングは前から好きで、3年前、何気に東京マラソンに応募したところ、倍率10倍なのにみごとに当選してしまいました。急きょ、本格的に練習しようと思いましたが、なかなか仕事も忙しく（言い訳？）練習不足で臨みましたが、20キロ過ぎの浅草の折り返しから足が重くなり、家族の応援もむなしくへろへろでゴール、5時間30分ほどでした。「こんな苦しいマラソンは、二度とやらない」と決心したところ、翌年、地元の横浜が初のフルマラソンを開催することのこと。

辛かったのも、けろっと忘れ、さっそく応募したら3倍の倍率をかいくぐって当選しました。今度はしっかり練習した（つもり）でしたが、1ヶ月前になって足首を痛め、間近になって、のどが腫れて最悪のコンディションで臨むことになり、あえなく30キロから歩き出してしまいました。またしても5時間30分となり、「もうフルは引退しよう」と思いましたが時間が経つと辛さも忘れ、せめて5時間切るまでは、との思いが強くなりました。そして、今回も再度、横浜マラソンに応募したら、またまた当選

しました（運だけは強い！？）。今度こそと思い、30キロ走、スクワット、日頃はマスクを付けて養生し、万全の態勢で臨むことができました。

今回は30キロでも足がへたれないで、終盤まで横浜の景色を楽しむことができ、最後の2キロは限界に来ましたが、沿道の大勢の人の「頑張っー」の応援に励まされて、やっとリベンジを果たすことができました。家族からも「その年でよく頑張ったね。」と見直されました。前の2大会は苦しいだけでしたが、今回は「マラソンって、こんなに楽しくて充実した一日を送れるんだ」と気がつきました。

引退はもうちょっと先延ばしにして、次は「熊本城マラソン」に参加したいと思う、今日この頃です。

脇坂 亮（昭和51年卒）



## 熊本弁講座 - 「さ」、「し」編 -



創刊号からシリーズ化した熊本弁講座ですが、記念すべき第10号は「さ」、「し」編です。どうぞ声に出して、熊本弁を懐かしんでください。

- ①「さるく」（歩く、うろつく）  
「あたげんじさんな、こぎゃん時間にどこばさるきよらすどか？」  
（お宅のおじいさんは、こんな時間にどこをうろついているの？）
- ②「さしより」（まず、とりあえず）  
「たいぎゃな疲れたな。さしより、ビールで乾杯ばしまっしょ！」  
（大変お疲れ様でした。とりあえず、ビールで乾杯しよう！）
- ③「さんによよう」（計算）  
「帰るばい。すんまっせん！さんによようばお願いしますばい」  
（帰りましょう。すみません！計算をお願いします）
- ④「しこつける」（気取る、格好つける）  
「あん人は、たいぎゃなしこつけらすな」  
（あの人は、とても格好つけるね）
- ⑤「しかぶる」（漏らす）  
「あんまり飲み過ぎと、しかぶるばい」  
（余り飲み過ぎると、お漏らしするよ）

It's a Kumamoto Dialect

## 幹事会・事務局からのお知らせとお願い

会員みなさま、お変わりありませんか。

今回、会報『東京鶴城会便り』も10回の発行になりました。故郷の風と香りをお届けしたいと思い頑張っています。今後とも財源が可能な限り、続けたいと思います。

宇土中・高校の卒業生という接点を大事に、人とのつながり、人生の潤滑油としても楽しい同窓会です。さらに発展させましょう。

以下、いくつかのお知らせとお願いです。

- (1) 会報の原稿を常時募集します。
  - ・あの日・あの時、故郷のこと、こんな人あんな人等、テーマは自由です。発行を楽しみにしている方が多くいらっしゃいます。あなたも投稿してみませんか。
  - ・感想、希望などお聞かせください。気楽にお願いします。
- (2) 住所、氏名などの変更は是非ご連絡ください。消息をご存知の方もお知らせください。個人情報に他に漏らすことは絶対ありません。
  - ・連絡がないと途絶えてしまいます。
  - ・同期会などの名簿をお送りください。
- (3) 年会費、広告、寄付をお願いします。
  - ・年会費が活動のベースです。単年度の収支は赤字です。わずかの繰越金で食いつないでいます。
- (4) 総会・懇親会への出席をお待ちしています。
  - ・同期、知り合いをお誘いの上ご来場ください。お一人様も、もちろん大歓迎です。

連絡先は、封筒の差出人（事務局）へ。原稿は事務局または、編集部の方までお願いいたします。

Email 河野 [kohno@msd.biglobe.ne.jp](mailto:kohno@msd.biglobe.ne.jp)  
坂崎 [mori.reds-041205@jcom.home.ne.jp](mailto:mori.reds-041205@jcom.home.ne.jp)

# 「古希記念ろくご会下田旅」

1965年卒の「ろくご会」では、2014年4月（平成26年）に卒業50周年を記念して日光への一泊旅行を企画実施致しましたが、同期の交流をさらに深めるべく、また、今度は、古希となるのを記念して「下田への古希記念一泊旅行」を企画実施致しました。私（境屋）が前回の「卒業50周年記念一泊旅行」の幹事を務めさせていただいた実績から、今回も懲りず？に、私が実行幹事の指名となりました。

準備は平成27年の「定例ろくご会」に間に合うように平成27年の10月頃から有志で打ち合わせを重ねて、平成27年11月28日の「定例ろくご会」で参加可否を確認出来るよう11月初旬には、会員皆さんに案内書を送付することが出来ました。

この「古希記念ろくご会下田旅」の立案と実施には、宿泊先の提供等々、永井秀夫君、河野毅君の絶大なる支援があってこそ実現出来たと感謝しています。計画立案、案内書送付（30数名）までは、順調でしたが、なんと予想に反して申込者が少なく、苦慮した末に、前回と同じく九州の有力会員を誘うことにしましたら、なんと、宇土から永里君、八代から米村君、福岡から矢野君が参加してくれるとの事で、なんとか12名が最終的にこの一泊旅行に賛同と参加をしてくれることとなりました。

それでは、「古希記念ろくご会下田旅」の概略を報告します。

日時、平成28年2月18日（木）～19日（金）

場所、ホテルジャパン下田

参加、12名（酒豪揃いの男だけ）

まず、参加者が九州から来るのも考慮して、出発の集合場所はJR東京駅の「銀の鈴」、時間は10時30分。「銀の鈴」は東京駅構内にある為、前もって乗車券を郵送しました。当日10時30分には、東京駅集合の9名が無事揃い、踊り子号115号にて出発しました。



当日、前もって買っておいた「焼き鳥弁当」とビール、焼酎で早速車内は宴会状態！

30数分後、途中大船乗車の朽木君と萩原君が合流し更に、車内は酒宴最高潮！

しばらくは、踊り子号車内は同期の会話が弾み、心地良い状態に成ったころ、最初の目的地の河津駅に到着。早速、名物の河津桜の見物に川の土手沿いを歩くが、桜は満開状態で、歩くには大混雑！何やら中国語を話していると思われる一団も大勢いて、花見どころの騒ぎではない状態。そんなことにはメゲズ、記念集合写真をパチリ！どうも2名程足りないと思ったら、さっさと足湯で寛いでいる同行者が2名！集合写真に写っていませんでした。残念ですが、仕方ありません。



河津桜を満喫して、再び河津駅から伊豆急下田駅へ、下田からはホテルのバスで今夜の宿泊先のホテルジャパン下田に到着。早速、みんなで温泉でゆっくり暖まり、夜は和食懐石の食

事に舌鼓！癒されます。食後は、幹事部屋に全員集合し、2次会の開宴。皆さん！元気で強い！

結局、やっと寝床に着いたのは夜11時頃でした。下田の第1日目は、こんな感じで参加者は充分満足出来たと思

います。

下田2日目、ホテルで朝食バイキングをたらふく食べて、お腹いっぱいホテルの玄関にて、今度は12名全員で記念写真！



そのあと、下田の名所「唐人お吉のお墓」へ、ガイドさんの説明になかなか感心しきりの古希の人たちをパチリ。このあと、近くの有名な干物屋さんで買い物をして、下田ロープウェイで「寝姿山」

観光へ小1時間ほど散策しました。

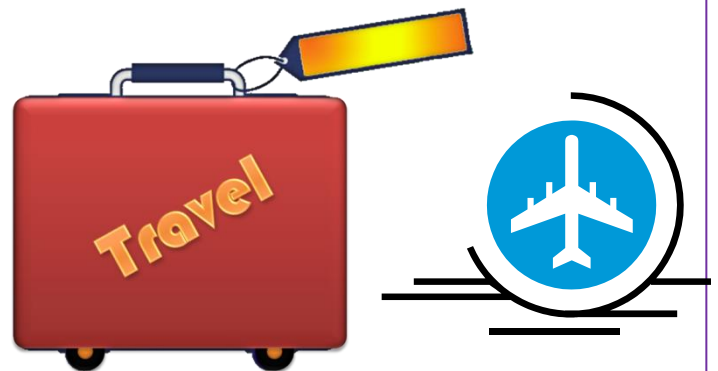
その昔、ペリー提督が黒船を率いて江戸幕府に開国を迫るために寄港したと思われる港かな？下田の観光も、帰りの踊り子号の出発時間がせまってきたので、伊豆急下田駅へ。実は、下田駅で売っている弁当に「美味しい弁当が無い」との事で、無理いって、地元の人に人気のある惣菜屋さんに特別に「下田弁」を予約注文してありまして、これがボリューム満点で金目の煮付も入って豪華でした。また時間に合わせてご主人がバイクで下田駅まで届けてくれたのには感激！下田へ行く人、弁当は下田の「進藤惣菜店」がオススメです。



いや～っ！うまかったパイ。

そんなわけで、帰りの踊り子号に乗って、無事皆さん帰路につきました。行き帰りの「駅弁」「飲酒」「つまみ」すべて予算内で提供できたのは、「南伊豆フリー乗車券」の購入等で、乗車券が通常より3,000円ほど圧縮出来たのと、参加者皆さんの協力のお陰と感謝致しております。ご苦労様でした、またの再会を皆で誓って大成功の「古希ろくご会下田旅」でした。

境屋由夫（昭和40年卒）



# It's a small world!

今回は、アメリカの大きさについて紹介した。今回は“世界の狭さ”について紹介したい。

ハーバードには、多くの学生が世界各国から勉強に来ている。特に大学院となれば、そのグローバル化はさらに広がる。同級生には、アフリカのある国の副大統領という人もいた。そんな学生の中に、プエルト・リコ出身の医学部の女性がいた。小柄な女性ではあったが、パワフルで、非常に優秀な学生だった。大学院の授業を受けながら、附属病院のスタッフと一緒にデータを集めながら学会発表を目指していた。

日本の医師は、主に基礎研究といって、いわば試験管の中で細胞がどのような働きをしているかを研究する人が多い。一方でアメリカでは臨床研究といわれる、薬を飲んだ患者さんが心臓病などの予防ができるか、コレステロールが下がっているか等を研究している人が多い。彼女は外科医を目指していて、外科の先生と一緒に手術の時の抗生物質をどのように投与するかを研究していた。アメリカでの外科医の地位は医療界でもトップで、大柄の医師の中に混じって小柄な外科医としてやっていこうと頑張っていることは、とても凄いことである。

そんな彼女なので、ハーバードまで来ているのだが、話をしているとペルーでも研究をしていたという。途中で思い出したかのように「そういえば日本人の女性と一緒に研究していた」と言い出した。実は自分がハーバードに行こうと思うきっかけを作ってくれたのが大学の先輩（女医）で、彼女もペルーの山の中で研究をしていたことがあった。「いやー、勉強熱心で本当に凄い女の子だなあ、自分の先輩女医さんにも負けないパワフルさがあるなあ」と感心して聞いていたら、何と私の先輩女医さんの名前を挙げたではないですか！これには本当に“たまがった”。「そがん偶然があつとかな」と。早速、先

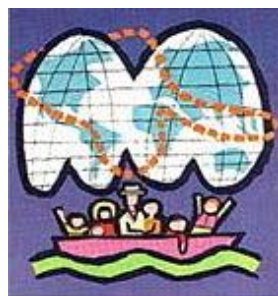
輩女医さんにメールを送ったところ、先輩も覚えていて、やはり優秀な学生だったとのこと。先輩もまさか彼女がいるとは、びっくりしていた。

世界の狭さについて実感した出来事をもう一つ。知り合いの旦那さんがフォア・ローゼズという赤いバラのラベルで有名なウイスキー会社の社長（当時）で、ケンタッキー州まで家族と遊びに行った。仕事の話を知っていると、何と宇土高の部活の先輩（われと同時期にアメリカ駐在、現在は東京で活躍中）が取引先の人と一緒に仕事をしてきたとのこと、またびっくり。全く知らない土地で、自分の知り合いに出会ったりすることは全くないと思っていたが、何とも驚いた出来事であった。

先日、外来に産まれたばかりのお子さんの予防接種のために来院した女性の方がいた。母子手帳を確認していたら、ある産婦人科で出産しており、その名前が大学の先輩のお父さんがやられている産婦人科の名前と同じだった。珍しい名前だったのでまさか!と聞いていたところ、熊本の先輩の実家の産婦人科で出産されたことが分かった。

こんな浅草で、先輩の実家で出産した人と会うとは、夢にも思わなかった。**What a small world!** 世界は狭い。

内山 伸（平成5年卒）



# 「水はたいしょつ！」

東京のコンビニで、今どき一番売れとるモンは何か知っていますか？ナンと「ミズ」だそうです。世の中もずいぶんと変わってきたもんだねえ。「ミズ」を買って飲む時代がくるなんて。ちょっと前までは、お茶がそんな感じだったたいね。お茶は店で買って飲むなんて、なんちゅう時代になったんかとほんなこつ、たまがった！

子供の頃、天草諸島の周囲4キロ、直線で1キロ位しかない離れ小島で生まれ育った私は、宇土高校の寄宿舎で三年間、学生生活を過ごすまで、「水」がいかに生活に欠かせない大事なモノかということ、肌身に実感して育った。「ミズはタダだけが一番、大切たい」と親にそんな感じで教わって生活していた。

島ではしょっちゅう水不足に陥り、部落のハズレにある共同管理の水タンクのある場所まで、天秤棒を前後に担ぎ、大きなブリキのタンゴ（バケツ）を水をいっぱいにして、フタの代わりに杉・ヒノキの枝葉をかぶせて運んでいたことを思い出す。狭いあぜ道を、子供にはとても重すぎるミズを家まで運んでくることは重要な任務のひとつだった。

雨水の有効利用は当り前のことであった。各家の庭

の隅に大きなセメント製のタンクが作ってあり、桶を伝ってそのタンクまで誘導して、貯水する仕組みになっていた。その溜まった水に消毒剤を入れて飲み水にしたり、風呂用水や生活用水に使っていた。

雨が何日も降らず、共同の貯水タンクもいよいよ空になりかけると、「給水船」なるものが登場することもあった。その給水船から配給された貴重な飲料水を家まで運び上げるのもまた重労働だった。身長は伸びんかったけど、足腰は還暦近くになってもいまだにしっかりガッチリなのは、そのころの生活が影響しとるのかなあと思う。

うちの子等の水の使い方の様子を見てみると、「ヒー！」と悲鳴を上げたくなるような感じたい。お風呂のシャワーは「強」で流しっぱ、顔を洗う、歯を磨くときの蛇口は出しっぱだし。今は亡き、私のおふくろさんが化けて出てきそう。「こらー。ミズはだいじたい。しょつやくしょんとばちかぶるばい！」ってな感じで叱咤されそうだ。



森内 忠美（昭和50年卒）



## 上京して30年経ちましたばってん、熊本人でよかったバイ!

東京に出てきて、3月で満30年を迎えた。「こぎゃん、東京におっとは思わなかったバイ」、「たいぎゃな、早かったバイ」今の気持ちを熊本弁で言うと、こんな感じだろうか。

30年前の上京のシーンを思い出そうと試みた。しかし、全く思い出すことができない。なぜだろうか? 故郷に後ろ髪を引かれる感覚はなかったのか? 友人と離れることになる寂しさはなかったのか? いや、どちらもあったと思いたい。だが、おそらく、東京の生活への期待と不安でいっぱいだった。期待した東京での生活。居心地が良かったかという、意外とそうでもなかったようだ。学生時代は夏が来るたび、正月が来るたび、また春が来るたびに、たつぷりと帰省し、祭りに興じ、旧友との思い出話や東京の土産話に花を咲かせた。故郷熊本、宇土への帰省は、身も心も豊かに潤す充電の機会だった。「だった・・・」ということは、東京で就職し、東京で所帯を持つと次第に故郷は遠ざかってしまったということだ。東京で過ごした30年間は、日数にすると3,657日だが、故郷に滞在した日数は、結局100日にも満たない。なるほど、これでは、もはや東京人だ。

平成2年から住んでいる文京区には、熊本ゆかりの美術館「永青文庫」がある。文京区に住み始めた頃から存在を知ってはいたが、一度も訪れたことがなかった。

昨年秋に開催され、20万人を超える人が鑑賞したという展覧会で初めて永青文庫を訪れた。展覧会では、作品の説明や永青文庫の由来について説明を受けた。細川家の屋敷跡の一隅に美術館が位置していること、そして、美術館のある文京区目白台には、かつては熊本県人会の学生寮があったとの話を聞き、故郷とのただならぬ縁を感じた。

そして、説明をしてくださった方の時折、混ざる熊本弁のイントネーションと熊本人の雰囲気、一気に懐かしさと忘れていたものを蘇らせた。「**やっば、熊本はよかね〜、熊本人でよかったバイ**」

原田 磨 (昭和60年卒)

## <編集後記>

平成22年に創刊した「東京鶴城会便り」がこの度、第10号の発行となりました。会員の皆様お一人おひとりに手作り感たっぷりの「お便り」を運んでいます。「**読んで楽しい。次回号が楽しみ**」のコンセプトに基づき、様々なジャンル(旅行、趣味、仕事、思い出話等)を取り上げています。素人の編集のため、至らない箇所も沢山あると思います。今後とも、皆様からの温かいアドバイスを頂いて、心を込めて、より良い紙面作りを目指します。

56会 (昭和31年卒)

大川 勝利  
櫻井 正男  
島田 勝年

車の買い取り・販売のご相談は  
日東金属株式会社・車輻部

代表取締役 永井 秀夫  
(昭和40年卒)

〒158-0083 世田谷区奥沢7-11-5  
TEL03-3704-0161 Fax 03-3704-0170

38会代表

田中 幸資  
大久保 千鶴  
(昭和38年卒)

PAPER AND PRINTING  
グローイン

代表 森内 忠美  
(昭和50年卒)

〒101-0051  
東京都千代田区神田神保町1-62 2F  
TEL & FAX 03(3259) 1116  
E-mail: growintn@atbb.ne.jp

## 知ったかぶりの“まめ知識” - vol.5

-知っとんなはっですか?-

「東京駅」編



今回は、東京駅です。2014年12月に開業100周年を迎えた東京の玄関口であり、日本一のプラットホーム数を誇る東京駅は、一日の乗降客数が約110万人で宮崎県の総人口に相当し、世界の駅の年間乗降客数でも第8位(ちなみに世界一は新宿駅)だそうで、まさに巨大なターミナル駅ですね。

東京駅の代表的な改札口は「丸の内口」と「八重洲口」ですが、それぞれの改札口を出ると、互いが競い合うように高層ビルが林立して圧倒されます。不動産大手のM地所が約30年前のバブル期に発表した、“丸の内マンハッタン計画”をふと思い出しました。近頃、同地所はJR東京駅前に、高さ約390mの日本一の超高層ビルの建設を発表しています。あの東京タワーよりも高く、日本の建築技術の進歩に驚かされます。

江戸時代は原野だった、今の東京駅とその周辺を江戸時代の人は、どのように思っていますでしょうか?

## 定年後は4つの趣味を持つ!?

定年退職前のライフプラン研修で、「定年後は4つの趣味を持ちなさい」というのがあった。①一人で外で、②一人で屋内で、③複数の人と外で、④複数の人と屋内で楽しむの4つである。考えてみると③と④は内気(?)な性格が災いし現役時代は何もなかった。

そんな時、町内会の人にメンバーと一緒に登山を楽しもうと誘われた。登山といえば「遭難=危険」。全く興味もなく経験もなかった。とはいえ、何かしなければという気持ちから飛び込んだ。会の名称は「群馬中高山岳会」。名前はいかめしいが、入会資格が50歳以上という「老人のハイキングクラブ」。入会して参加するうちに楽しみが分かってきた。老人とはいえ昔から登山している人の脚は驚くほど強い。80歳の人もいるが負けそうだ。会のモットーは「安全に、楽しく」。このため当日は雨の天気予報が出ると中止の連絡がくる。登山中は息もあがり「きつか」と思う時もあるが、頂上に着き景色を見ると疲れも吹っ飛ばす。(見えないときはがっくり)群馬の山からも天気が良いと、富士山が見えることもあり得た気分になる。時々、山道でころんで顔をす

りむいたり、脚がつることがなければもっといいのだが。(下山時、特に要注意)

頂上で食べる昼食は「うまか」の一言。参加した女性会員手作りのおかずやら果物が次から次へとまわってきて、持参した自分のおにぎりを食べる暇がない位。

楽しみは他にもある。登山途中の会話。人生経験豊富、職歴も異なる他人の話は聞いているだけでも楽しいし、加わればなおのこと。1回の参加者数は10~40名とばらばら。

会のメンバーは前橋支部だけで35名、内女性は19名である。他支部も同じで女性が多い。(さすが、「かかあ天下」の地、群馬)

仕事の関係で毎回は参加できないが、体力の続く限り楽しみたいと思う。

(参考)登山で使用する用具、食品は小型で機能性に優れたものが多く、常備すれば地震等災害時にも役立つ。登山する、しないに関係なく一度アウトドアのお店を覗いてみては如何でしょうか。食品は棒ラーメンが良い。カップラーメンに較べ場所をとらない。「アベックラーメン」は最高たい。

太田 敏幸 (昭和42年卒)

